

# 神戸製粉工業の概況

## 日本製粉神戸工場

日本製粉会社は、明治二九年九月創立されたが、同社は同四〇年四月に兵庫工場を開設した。能力はノーダイク式六〇〇バーレルという規模のものであったが、この工場は、大正七年一〇月火災のために焼けてしまった。同社は大正九年三月東洋製粉会社を買収したが、東洋製粉は神戸に工場をもっていたので、これを兵庫工場に改め、大正一三年三月神戸工場と改称した。能力は一二〇〇バーレルであった。神戸工場も戦中、戦後の曲折を経て、現在五八〇〇バーレルの新鋭設備を築いている。余談になるが、日本製粉は同じ大正九年三月門司市の株式会社大里製粉所（一二〇〇バーレル）を合併している。大里製粉所は大正五年神戸産業史に巨大な足跡を残した鈴木商店の創設にかかるものであったが、この合併によって、日本製粉と鈴木商店との関係はきわめて密接なものとなり、原料の輸入、製品の販売は鈴木商店の内外にわたる商権網を通じておこなわれるようになつたといふ。

◇世界市場を独占  
昭和八年ホクレンは精製工場を建設し、輸出に乘出した。全く無名のため、なかなか受入れられず、少量であったので、神戸業界に脅威を与えるといふほどではなかったが、昭和五年日本輸出農産物株式会社の設立まで、ホクレンと神戸業界との対立抗争は、国内取引でも激しくなりひろげられていった。

段をもたず、工場のないホクレンは從来の神戸業界との間にいろいろな対立を生じた。

昭和八年ホクレンは精製工場を建設し、輸出に乘出した。全く無名のため、なかなか受入れられず、少量であったので、神戸業界に脅威を与えるといふほどではなかったが、昭和五年日本輸出農産物株式会社の設立まで、ホクレンと神戸業界との対立抗争は、国内取引でも激しくなりひろげられていった。

◇世界市場を独占  
昭和初年に品不足が続き値が高くなつたため、作付面積が順次増加し昭和一二年一四年ごろにはわが国として最高の生産及び輸出をみた。一方国内消費は明確でないが、年間薄荷脑九〇トン、薄荷油六〇トンであつたといわれる。

当時、日本の薄荷は世界産額の約八〇%を生産し、製造高の約九〇%に當る量を輸出、樟脑などとともにわが国輸出農産物のうち枢要な地位を占めて大いに外貨を獲得し、ほとんど世界の市場を独占していたといつてもいいすぎでなかつた。

日本製粉会社は、明治二九年九月創立されたが、同社は同四〇年四月に兵庫工場を開設した。能力はノーダイク式六〇〇バーレルという規模のものであったが、この工場は、大正七年一〇月火災のために焼けてしまった。同社は大正九年三月東洋製粉会社を買収したが、東洋製粉は神戸に工場をもっていたので、これを兵庫工場に改め、大正一三年三月神戸工場と改称した。能力は一二〇〇バーレルであった。神戸工場も戦中、戦後の曲折を経て、現在五八〇〇バーレルの新鋭設備を築いている。余談になるが、日本製粉は同じ大正九年三月門司市の株式会社大里製粉所（一二〇〇バーレル）を合併している。大里製粉所は大正五年神戸産業史に巨大な足跡を残した鈴木商店の創設にかかるものであったが、この合併によって、日本製粉と鈴木商店との関係はきわめて密接なものとなり、原料の輸入、製品の販売は鈴木商店の内外にわたる商権網を通じておこなわれるようになつたといふ。

た。こうして生れた日本製粉と鈴木商店の特殊な関係は、その後も大正尾をひいて、大正一五年一月に、政府は両社に対し八〇〇万円の救済融資をおこなうほどであり、昭和二年の金融恐慌による鈴木商店

た。こうして生れた日本製粉と鈴木商店の特殊な関係は、その後も大正尾をひいて、大正一五年一月に、政府は両社に対し八〇〇万円の救済融資をおこなうほどであり、昭和二年の金融恐慌による鈴木商店

の没落で、日本製粉も致命的打撃を受けた。日本製粉は三井物産をバッタとして立直った。同社の常務安川雄之助が社長に就任したが、日本製粉は鈴木の側からすれば、かつての商敵の手中に收められたわけで、これは日本産業興亡史の中に残された運命的な一挙話といつてよからう。

◇薄荷商人と北海道産地の紛争  
一方、北海道が薄荷の主産地となると、神戸業界は自分たちに有利に投機的取引をおこなつた。たとえば明治末期まで薄荷商はわずか五人で、たがいに協定して安く買取っていた。薄荷商は春から先売りしていくので凶作になつても、自己の採算で買い、豊作となれば思い切り買いたいた。當時薄荷商が「泥棒商」といわれたのもこのような取引の性格と、薄荷商人の談合がとくに夜を選んで、下湧別の料亭の奥で秘かにおこなわれたことによつている。あまりの買いたたきに怒つた農民が大正二年末、野付牛の鈴木商店の出張所を破壊し、各地で薄荷商人を相手に騒動を起したが、結局、わずかな一時金であしらわれた。翌年には、空前の安値で取引されたが、もはや農民は騒動を取す気力もなかつたという。そのため、北海道の生産者団体であるホクレン（昭和六年結成された北海道信用購買販売組合連合会）は、北海道薄荷の統制に乗り出した。しかし、まったく販売手

薄荷は唇形科薄荷属に属する植物で、茎葉の汁（取卸油）から精製して結晶（脑）油をとる。これらは明治初年から日本の特産物として広く海外に輸出されてきた。日本における薄荷栽培の歴史は古く、平安朝の文献に薬草の一類メグサとしてすでに記されているが、産業として発展したのは、明治初年山形県においてである。しかし、明治一八〇九年を最盛期として、その後養蚕業が盛んになるにつれて衰え、明治後期には代つて中国地方（三備薄荷）、北海道が主産地となつた。

一方、わが国における薄荷の精製は明治一五年コッキン（英）が横

浜に脱脂工場を建設したことにはじまる。その後、多勢、矢沢、小林、長岡の各薄荷商が相次いで横浜に工場を建設したため、当時輸出の中心はもっぱら横浜港であつた。その後、三備地方の生産の伸長に目をつけた鈴木商店が、明治三五年神戸に工場を建設し、神戸港からも輸出がおこなわれる様になつた。これが「鈴木薄荷」の起源である。大正一二年の大震災以前は、横浜、神戸両港からほぼ同量の輸出がおこなわれていたが、大震災により、横浜の工場が全滅したので、長岡、小林の工場が神戸に移転してきた。期せずして、当時の五大メーカー（鈴木・小林・矢沢・長岡・多勢）のうち四社

が神戸に集まることとなり（矢沢氏は大正七年に神戸に移転していた）わが国薄荷製造の中心地は横浜から神戸に移ることとなつた。

一方、北海道が薄荷の主産地となると、神戸業界は自分たちに有利に投機的取引をおこなつた。たとえば明治末期まで薄荷商はわずか五人で、たがいに協定して安く買取っていた。薄荷商は春から先売りしていくので凶作になつても、自己の採算で買い、豊作となれば思い切り買いたいた。當時薄荷商が「泥棒商」といわれたのもこのような取引の性格と、薄荷商人の談合がとくに夜を選んで、下湧別の料亭の奥で秘かにおこなわれたことによつている。あまりの買いたたきに怒つた農民が大正二年末、野付牛の鈴木商店の出張所を破壊し、各地で薄荷商人を相手に騒動を起したが、結局、わずかな一時金であしらわれた。翌年には、空前の安値で取引されたが、もはや農民は騒動を取す気力もなかつたという。そのため、北海道の生産者団体であるホクレン（昭和六年結成された北海道信用購買販売組合連合会）は、北海道薄荷の統制に乗り出した。しかし、まったく販売手

## 贊助

### 株式会社 神戸製鋼所

社長 外 島 健 吉

### 帝人株式会社

社長 大 屋 晋 三

### 日商岩井株式会社

社長 西 川 政 一

### 太陽鉱工株式会社

社長 高 畑 誠 一

☆ 贊

社長 横 田 周 作

（神戸市史から）